１１

生徒一人ひとりの人間力の向上

１．設定理由

近年，高度に発達した科学，豊かな経済に支えられた消費社会，情報化，少子高齢化，国際化，価値観の多様化など社会は大きく変化している。こうした社会の状況は，子どもの生活や心身の成長にも大きく影響を及ぼしている。特に心の問題として，耐性の欠如，自律性の不足，自己中心性の強化，規範意識の低下，人間関係の希薄化等が大きな課題となっている。こうした課題を踏まえて，生徒が現在及び将来の生活を豊かに生き抜いていくためには，「人間力」の育成が不可欠である。

「人間力」とは，市川伸一(2003)らによれば「自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義される。それを受けて，古藤泰弘(2006)は，学校教育における「人間力」の定義を「自立した一人の児童生徒として認知的・技能的・情意的な力のバランスをとりながらそれらを高め総合的に発揮していける力」としている。これらの能力の育成は，様々な分野を網羅する各教科の学習を行うことで効果的に達成できるものと考える。

本校は，2015 年から２年間にわたり茂原市教育委員会の学習指導の指定を受け，ＩＣＴの有効な活用の在り方を探ってきた。日頃の授業にＩＣＴを積極的に活用することにより我々の授業力向上とともに，「学びの場」の工夫・改善をめざしている。合わせて生徒の育成すべき資質・能力の具体的な姿を明確にし，どのように高めていくのかという視点を大切にすることで，キャリアを形成していくために必要な資質・能力を育成できると考える。

２．研究仮説

各教科・領域の特性を生かしながら育める人間力の要素を整理し，ＩＣＴを有効・適切に活用し，生徒主体の活動を工夫すれば，人間力が総合的に身に付き，キャリアを形成していくために必要な資質・能力を育成することができるであろう。

３．研究内容

Ⅰ　人間力についての理論研究
Ⅱ　本校における「人間力」の定義とめざすべき生徒像の検討
Ⅲ　育成したい能力を明確にした実践

４．結　　論

人間力とは必ずしも数値で計れるものではなく，手立てを講じたからすぐに効果が現れるものでもない。その上で，生徒の実態を把握した上で育てたい力を明確にし，その力の育成に向けてどのようにアプローチしていくかが必要である。教員が様々な場面で指導にあたる際に，どのような視点でとりくみ，目の前の生徒をどのように育てていきたいかという姿勢が一番大切であると感じた。

長生支部
茂原市立南中学校
中　舘　　武　優
赤　羽　　大　輔

１８

1　研究主題

生徒一人ひとりの人間力の向上

2　主題設定の理由

（1）今日的課題から

近年，高度に発達した科学，豊かな経済に支えられた消費社会，情報化，少子高齢化，国際化，価値観の多様化など社会は大きく変化している。こうした社会の状況は，子どもの生活や心身の成長にも大きく影響を及ぼしている。特に心の問題として，耐性の欠如，自律性の不足，自己中心性の強化，規範意識の低下，人間関係の希薄化等が大きな課題となっている。こうした課題を踏まえて，生徒が現在及び将来の生活を豊かに生き抜いていくためには，「人間力」の育成が不可欠である。

「人間力」とは，市川伸一(2003)らによれば「自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義される。それを受けて，古藤泰弘(2006)は，学校教育における「人間力」の定義を「自立した一人の児童生徒として認知的・技能的・情意的な力のバランスをとりながらそれらを高め総合的に発揮していける力」としている。

これらの能力の育成は，様々な分野を網羅する各教科の学習を行うことで効果的に達成できるものと考える。各教科の特性を踏まえて，各教科で育むことができる「人間力」の要素を整理し，それらの育成に向けて焦点化した授業を試みれば，効率的に「人間力」の多様な要素を身につけることができるのではないだろうか。

本校は，2015 年から２年間にわたり茂原市教育委員会の学習指導の指定を受け，ＩＣＴの有効な活用の在り方を探ってきた。日頃の授業にＩＣＴを積極的に活用することにより我々の授業力向上とともに，「学びの場」の工夫・改善をめざしている。合わせて生徒の育成すべき資質・能力の具体的な姿を明確にし，どのように高めていくのかという視点を大切にすることで，本校の研究主題に迫っていきたいと考える。

（2）学校教育目標から

本校は，2016 年には＜文質彬彬（ぶんしつひんぴん）＞「夢の実現に向けて学び，人間力を高めるとともに，心身ともに健康で，豊かな心を持った生徒の育成」を学校教育目標に掲げ，教育活動全体を通して，実践を重ねてきた。

例えば，運動会やおおとり祭合唱コンクールなどの学校行事では，「頑張れば感動」を本校のスローガンとし，生徒と職員が一丸となりとりくんでいる。３月に行われる３年生を送る会は，卒業生や在校生，そして職員が一つとなった感動的な行事として，例年，好評を得ている。生徒会活動や委員会活動，部活動等においては，自ら考え，行動しようとする場面がよく見られる。中でも，生徒会を中心に，心と心をつなぐあいさつ活動を推進しており，本校の銀南通りでの振り返り挨拶は，良き伝統として引き継がれている。このように生徒会活動や学校行事等で，生徒個々の「人間力」が発揮されている。「人間力」をさらに向上させるためには，生徒が１日の教育活動の中で最も多くの時間を費やしている各教科の授業の充実をこれまで以上に推進する必要がある。そこで，各教科・領域の特性を踏まえた「人

間力」の要素を指導目標の中に位置づけ，学校教育目標や目指す生徒像の具現化を図りながら本主題に迫りたいと考える。

（3）生徒の実態から

明るく素直で，何事にも一生懸命にチャレンジすることができる生徒が多い。また，行事や生徒会活動にも積極的にとりくみ，与えられた役割を最後まで果たすことができる生徒が増えている。

一方，学習においては，落ち着いた雰囲気の中で学習を進めることができているものの，上位と下位の生徒の学力差が大きく，学力不振から学習に対する意識が低下している生徒へのフォローが課題となっている。特に，堂々と自分の考えを伝えることができない生徒が多く，その理由として，成功体験が少ないために，やればできるという自信を持てないことが考えられる。

このような現状を踏まえ，古藤泰弘(2006)が述べる学校教育における「人間力」の定義を参考にし，一人ひとりの生徒を認知・技能・情意の面で向上させ，自信を持って行動できる生徒の育成をめざしたいと考える。

（4）キャリア教育の視点から

2011 年 1 月に中央教育審議会の答申の中でキャリア教育を『一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることをとして，キャリア発達を促す教育』と定義している。キャリア教育とは，子ども・若者がキャリアを形成していくために必要な能力や態度の育成を目標とする教育的な働きかけである。児童・生徒が「生きる力」を身につけ，社会の激しい変化に流されることなく，いずれ直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し，社会人として自立していくことができることを目的としている。本研究では，人間力の向上を研究テーマとして掲げている。東京大学教授市川伸一氏は，「人間力」とは，「生きる力」の理念をさらに発展させ，具体化したものという捉え方をしている。両者は全く異なるものではなく，真新しいものでもない。「生きる力」をより具体化し，その構成要素を明確にしたものが「人間力」である。従って，生徒の人間力の向上を目指し，個々の生徒の資質・能力を，どのように，そして何のために育てていくのかというとりくみこそが，キャリア教育であると考える。

3　研究仮説

各教科・領域の特性を生かしながら育める人間力の要素を整理し，ＩＣＴを有効・適切に活用し，生徒主体の活動を工夫すれば，人間力が総合的に身に付き，キャリアを形成していくために必要な資質・能力を育成することができるであろう。

4　研究の実際

（1）「人間力」とは

「人間力」の育成を目指し，2002 年に内閣府は「経済活性化戦略」の１つとして人間力戦略研究会を発足させ，翌年に「人間力戦略研究会報告書　若者に夢と目標を抱かせ，意欲を高める～信頼と連携の社会システム～」をまとめ，公表した。

その中で，座長であった東京大学教授市川伸一氏は，次のように述べている。

文部科学省は，近年の教育改革の中で，自ら学び，自ら考える力などの「生きる力」という理念を提唱してきた。「人間力」とは，この理念をさらに発展させ，具体化したものとしてとらえることができる。すなわち，現実の社会に生き，社会をつくる人間をモデルとし，その資質・能力を「人間力」として考える。本委員会の採用した人間力の定義とは，「社会を構成し運営するとともに，自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」ということになる。

この定義は，多分にあいまいさを含んでいる。しかし，私たちは，人間力という概念を細かく厳密に規定し，それを普及させることをこの研究会の使命とは考えていない。人間力という用語を導入することによって，「教育とは，何のために，そのような資質・能力を育てようとしているのか」というイメージを広げ，さらにそこから具体的な教育環境の構築が始まることにこそ意義があるのである。

（人間力戦略研究会，人間力戦略研究会報告書，2003 年，p4）

これまでに学校教育で言われてきた「新学力」(1991)や「生きる力」(1996)，そして「確かな学力」(2002)も「人間力」の重要な要素である。真新しいことにとりくむのではなく，今までのとりくみをさらに発展させ，具体化したものととらえることが大切である。人間力戦略研究会では，「人間力」を「社会を構成し運営するともに，自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義している。

また，具体的に人間力の構成要素と，それを発揮する活動に着目して次のようにまとめている。

・具体的には，人間力をその構成要素に着目するならば，

①「基礎学力（主に学校教育を通じて修得される基礎的な知的能力）」，「専門的な知識・ノウハウ」を持ち，自らそれを継続的に高めていく力。また，それらの上に応用力として構築される「論理的思考力」，「創造力」などの**知的能力的要素**

②「コミュニケーションスキル」，「リーダーシップ」，「公共心」，「規範意識」や「他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高め合う力」などの**社会・対人関係力的要素**

③これらの要素を十分に発揮するための「意欲」，「忍耐力」や「自分らしい生き方や成功を追求する力」などの**自己制御的要素**

などがあげられ，これらを総合的にバランス良く高めることが，人間力を高めることと言えよう。

・また，人間力は，それを発揮する活動に着目すれば，

①職業人としての活動に関する「**職業生活面**」

②社会参加する市民としての活動に「**市民生活面**」

③自らの知識・教養を高め，文化的活動に関わる「**文化生活面**」 に分類される。

・人間力は，学校，家庭，地域及び産業等のそれぞれの場を通じて段階的・相乗的に醸成されるものであり，人間力強化のためには，学校，家庭，地域及び産業等という四者間の連携・協力が不可欠といえる。 （人間力戦略研究会，人間力戦略研究会報告書，2003 年，pp.10-11）

（2）学校教育における「人間力」について

古藤泰弘氏(2006)によると，市川伸一(2003)も「教育，産業，労働，雇用の分野から『人間力』を考えた」と述べており，この定義や構成要素をそのまま学校教育における「人間力」にあてはめるには多少の無理があると述べている(東京教育工学研究会・全国研究セミナー(基調講話)2006 年 8 月 5 日)。

そこで，古藤は「人間力」を学教教育レベルで次のように捉えている。

自立した一人の児童・生徒として認知的・技能的・情意的なバランスをとりながら

それらを高め総合的に発揮していける力

その構成要素として，

①「確かな知的能力」

… 知識・理解や思考力，判断力などの「認知的能力」

②他者を尊重し高め合う「技能や能力」

… 読み・書き・計算や身体運動，見方・考え方，表現力や発表力，コミュニケーション力などを含めた「技能的能力」

③関心や意欲が旺盛で自己制御できる「精神力」

… 興味・関心や意欲，感動，信念・価値観，行動力などの「情意力」

と分類している。

本研究においては，育成したい能力を，古藤氏が述べる認知面，技能面・情意面に分類し，その中でも，本校の現状を踏まえ「思考力・表現力」，「感動」，「信念・価値観」，「行動力」の育成に重点を置いた。日常の指導において，どのような工夫ができるのかを検討し，生徒の「人間力」の向上をめざしていきたい。

（3）「人間力」の定義と本校のめざす生徒の姿

① 自立を支える「人間力」とその定義

義務教育の最終段階である中学校の果たす使命は，実社会へ羽ばたく生徒が，単に知識の獲得だけでなく，それらを活用して現在及び将来を豊かにたくましく生き抜いていけるように心身を育てることである。近年，生徒を取り巻く環境は大きく変化しており，生徒の生活や心身の成長にも大きく影響を及ぼしている。そのような中で，単に知識を獲得するだけでなく，自ら考え，自ら行動できる自立した姿が求められている。本校では，古藤泰弘氏が述べる「自立した一人の児童生徒として認知的・技能的・情意的な力のバランスをとりながらそれらを高め総合的に発揮していく力」を人間力と定義し，自立した生徒を目指して，「認知的・技能的・情意的な力」を付けるために，どのような方策を講ずるべきかを検討した。

② 自立した生徒の姿 ～どのような生徒を育てるべきか～

まず，どのような力を生徒に身に付けさせることが「人間力」の育成に必要かを検討した。基礎学力の低下が叫ばれる中，知識の習得のみが「人間力」の育成につながるとは考えられない。そこで，古藤氏が述べる構成要素のうち，「思考力・表現力」，「感動」，「信念・価値観」，「行動力」の育成に重点を置き，次の４つをめざす生徒像とした。

- 思考し表現できる生徒　（教科・領域による授業）
  …自分の考えを表現することができ，他との関わりを通して，さらに自分の考えを高め合える生徒
- 感動できる生徒　（学校行事・部活動）
  …仲間と感動を分かち合える生徒
- 豊かな心を持った生徒　（道徳）
  …強い意志を持ち，心優しい生徒
- 行動力のある生徒　（生徒会活動・委員会活動）
  …自らが考え，課題意識を持って行動することができる生徒

③ 人間力育成に向けたＩＣＴ活用の期待される効果

2009 年３月に文部科学省より「教育の情報化に関する手引」が発表され，ＩＣＴを活用した学習指導の具体例，そのためのＩＣＴ環境の整備や教員研修の在り方について示している。現行の学習指導要領では，情報教育や教科指導におけるＩＣＴ活用など，教育の情報化に関わる内容について充実が図られている。ほぼすべての教科において，ＩＣＴ活用に関する記述が見られ，学習指導においてＩＣＴを活用することが必須になったものと思われる。2016 年７月に発表された「教育の情報化加速化プラン」においても，新たな「学び」やそれを実現するための「学びの場」を形成するために，ＩＣＴを効果的に活用していくようにと述べており，今後もより一層の充実が求められていくと考える。

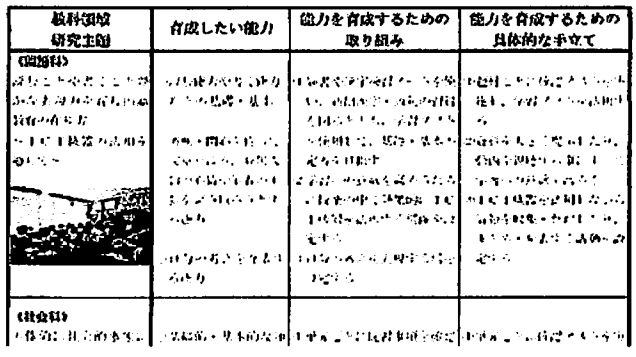
5　実践内容

（1）思考し表現できる生徒の育成をめざした実践（ＩＣＴの活用）

関連の深いキャリア教育の能力	人間関係形成・社会形成能力	○	自己理解・自己管理能力		課題対応能力	◎	キャリアプランニング能力	

① 教科領域研究主題の検討

教科領域において，育成したい能力を明らかにし，それぞれの部会で具体的なとりくみを検討し，指導のポイントを明確にした。その際，ＩＣＴ等を積極的に活用し，従来の指導方法を工夫・改善することを目標とした。



教科領域研究主題	育成したい能力	能力を育成するための取り組み	能力を育成するための具体的な手立て
《国語科》			
《社会科》			

② 各教科・領域の主な実践

機器が十分にそろっている環境ではないが，工夫次第では効果が大きいことが明らかとなった。画像や資料を効果的に提示することは関心・意欲を持たせることに有効であり，授業の一場面での活用が有効である(図１)。教科書の挿絵や生徒のプリントを投影することは，視線が自然と上がり，生徒の理解を助けることができる(図２)。タブレットで「遅延再生機能」を用いて，自らの動きを知り課題を明確にすることができる(図３)。他の機能と組み合わせることで，さらに効果が得られる。撮影をし映像を視聴することで，自分自身を客観的に見つめ，改善していくことにも有効である(図４)。

図１（国語科）

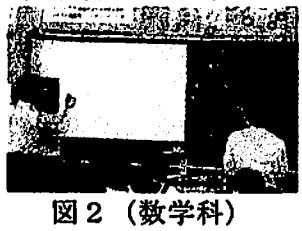


図２（数学科）

図３（保健体育科）

図４（英語科）

③ 授業力向上をめざしたとりくみ

見通しを持った授業構成の在り方について検討を重ねてきた。板書計画や学習問題とまとめの一貫性についての研修をし，研究授業や相互授業参観を行った。主なポイントとして，

・学習問題が設定できるまでの過程を大切にする。
・学習素材をＩＣＴ等を用いて視覚的に扱う。
・学習問題に対応した明確なまとめをする。
・あとから振り返って，本時の学習過程がわかるような板書を心掛ける。

以上の点を念頭に置き，板書で本時の学習の要点がわかる授業をめざしている。

（２）感動できる生徒の育成をめざした実践

関連の深いキャリア教育の能力	人間関係形成・社会形成能力	◎	自己理解・自己管理能力	○	課題対応能力	○	キャリアプランニング能力	○

2017 年３月に告示された新中学校学習指導要領第５章において，特別活動の目標は次のように示されている。

> 集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ，様々な集団活動に自主的，実践的に取り組み，互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して，次のとおり資質・能力を育成することを目指す。
>
> (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し，行動の仕方を身に付けるようにする。
>
> (2) 集団や自己の生活，人間関係の課題を見いだし，解決するために話し合い，合意形成を図ったり，意志決定したりすることができるようにする。
>
> (3) 自主的，実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして，集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに，人間としての生き方についての考えを深め，自己実現を図ろうとする態度を養う。　（中学校学習指導要領　第５章　特別活動，2017 年３月，p147）

(3)で示された「人間としての生き方についての考えを深め，自己実現を図ろうとする態度」の育成を図るために，生徒一人ひとりが自らのよさを生かし，様々な場面において主体的に取り組むことができるよう，教員が綿密に計画を立て，支援をすることが必要であると考える。特に，集団の一員であるという所属感を深めることができる学校行事は，生徒に学校生活に充実感を味わわせることができ，日々の生活に秩序と変化を与えることができる重要な一面をもっていると思われる。

そこで，本校では，生徒一人ひとりの自主的，実践的な態度を育むとともに，生徒の体験的活動を一層活性化させるために，次の２点を大切にしたいと考える。

①　話し合い活動の充実

②　生徒の手による主体的なとりくみ

まず，話し合い活動の充実をめざす理由は次の３点である。

（Ⅰ）豊かな人間関係づくり

昨今，人間関係が希薄であったり，他人に対する共感的理解が十分でないために，心ない言動によるトラブルが後を絶たない。このことは本校の生徒指導上の課題のひとつとなっている。他との関わりを活性化することで，人の気持ちを理解することができ，憂いのわかる心優しい生徒の育成につながると考える。また，話し合いによって決まったことを全員で実践することにより，協調性を育めるなど，生徒同士や生徒と教員の関係をより豊かにできるのではないだろうか。

（Ⅱ）主体的な態度の育成

学校生活では，さまざまな問題に直面する。それらへの対応や解決策を，他との関わりを通して，実践的，体験的に学んでいくと思われる。どうしたらよいか知恵を出し合ったり，失敗から原因を追求したりと自らの手で困難に立ち向かっていくことが必要である。そのためにも，生徒が自分たちの手で発案し，創意工夫をした活動にとりくめるような場面を設定してあげることが大切であると考える。

（Ⅲ）社会性の育成

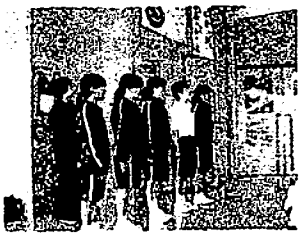
社会性は，学校で生活したらすぐに身につくというものではなく，集団において一人一人が自分の役割や責任を果たすことにより，何かをやり遂げたという経験の積み重ねにより，次第に身についていくものと思われる。また，自分の意見を主張するだけでなく，相手の意見も取り入れ，集団をよりよい方向へ導くためにはどうすればよいかと考えることも大切である。他との関わりを通して，集団で問題を解決する力が高まり，より質の高い集団生活を送ることができるのではないだろうか。

また，生徒の手による主体的なとりくみを通して，「自己決定のできる」「他の意見を認めることができる」「よりよいものを求めようとする」生徒の育成をめざしていきたい。

以上の積み重ねを通して，本校のスローガンである「頑張れば感動」の具現化を図り，本研究の４つの柱のひとつである「感動できる生徒」の育成をめざしていきたいと考える。

学校行事における話し合い活動を重視した主なとりくみを紹介する。

① 第１学年でのとりくみ



鴨川での校外学習では，中学校における規範意識の大切さを確認するとともに，実行委員会や係長会議の話し合いを通じて，具体的なルールを決めていった。校外学習の集会では，実行委員会を中心に運営を行った。生徒は小学校での経験もある様子で，運営にあたる生徒は堂々と発表することができた。各係長もそれぞれの役割から，校外学習を成功させるために必要な行動規範を述べることができた。

② 第３学年でのとりくみ

《修学旅行での実践》

クラス別行動や班別行動では，生徒が見学場所に対して関心をもち，進んでそれらを調べようと活発な話し合いができた。その結果，決められた時間内で班員の希望する場所への見学が可能かどうか，時間的に無理がないかを検討し，お互いを尊重しあいながら建設的な話し合いができた。

《運動会での実践》

運動会では，応援合戦での内容を生徒が考えるときに，インターネットでの情報収集を通して，演技構成について話し合いを活発に行わせている。そこでアイディアを出し合うことで，生徒が主体的にとりくむことができ，一般団員を引っ張っていこうという意欲的な姿勢がみられる。

（３）豊かな心を持った生徒の育成をめざした実践

関連の深いキャリア教育の能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
		○	◎	

道徳の時間や行事，日頃の生活を通して，望ましい生活習慣の確立と自らの生き方を見つめ，自らの特性を伸ばそうとする意志を養うことをめざしてきた。道徳の時間における主なとりくみを紹介する。

① 映像教材を取り入れた導入の工夫

千葉県の映像教材を積極的に活用した。単に映像を流すだけでなく，掲示物を活用しながらストーリーや登場人物の確認に役立てている。映像を視聴することにより，生徒の興味・関心を高めることができた。

② 話し合う場の設定

授業者とのやりとりではなく，グループによる生徒同士の話し合いの場を設定した。プリントや関係図を用いることで，話し合いを深めることができ，より多くの意見が出された。また，学級の係活動や生徒会活動とリンクさせ，望ましい生活習慣の確立をめざし，継続的な指導につなげている。

（4）行動力のある生徒の育成を目指した実践

関連の深いキャリア教育の能力	人間関係形成・社会形成能力	◎	自己理解・自己管理能力	◎	課題対応能力	◎	キャリアプランニング能力	◎

本校では，生徒会活動を通して学ばせ，身につけさせたい力として次のように考えている。

《 リーダー 》
- ◇**自己教育力**
- ◇企画力・実行力
- ◇集団を指揮し，運営していく力
- ◇一般生徒の要求や要望を知り，正しいものは全力をあげて実現させていく実行力
- ◇仲間への深い理解と信頼の獲得

《 全校生徒 》
- ◇**自己有能感**
- ◇仲間と力を合わせてとりくむことの楽しさ・充実感

また，生徒会活動の運営方針として，次の４点を掲げている。

- 各委員会の日常活動を，話し合いを通して充実させ，全生徒が参加し，一人ひとりの意見や希望が，反映された活動になるようにする。
- 全生徒が生徒会活動への関心を高め，積極的な行動ができるようにするため，生活目標をより具体化する。また，広報活動について適切な指導を行い，生徒の活動を内面から方向付けるように援助する。
- 生徒会関係の諸行事については，形式的な活動に陥らないよう，とりくみの見通しを常に持たせるため，計画的準備を含めて時間をとるようにする。
- 生徒の発表場面の随所にＩＣＴを活用し，発表の仕方を工夫していく。

生徒会活動における話し合い活動を中心とした主体的なとりくみを紹介する。

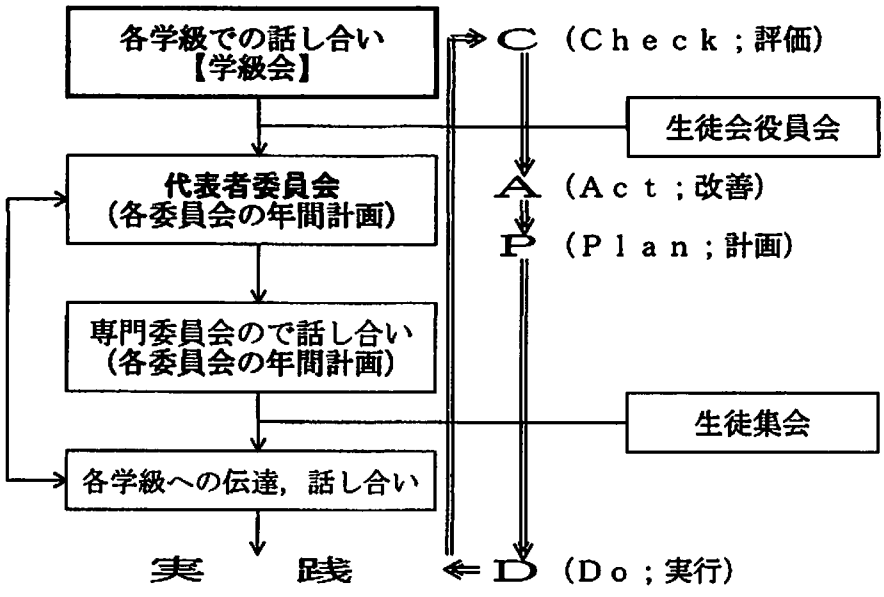
① 代表者委員会までのながれ（定例の話し合い活動）

各学級での話し合い活動を行うことで，学級の問題点や課題をそれぞれの立場で見つめ，考えることができるようになった。話し合い活動が活発化したことにより，日々の学校生活での実践がより主体的になった。

代表者委員会では，各クラスから持ち寄られた課題等を学年提案としてまとめる。専門委員会委員長は委員会の枠を超えて活動に伴う諸問題について話し合いをもち，委員会としての提案をまとめる。生徒会役員は，年間の活動計画に基づき，学校全体の活動についての提案をまとめる。この３つの提案を話し合い，吟味することで次の月の目標や具体策を決定している。

学級会を位置付けることにより，学級でのＣ（評価）からスタートし，代表者委員会では，Ｃ（評価）とＡ（改善）に重点を置けるようになった。ＰＡＣＤサイクルからＣＡＰＤサイ

クルに改善することにより，生徒の手による主体的な生徒会活動が行えるようになっている。



② 専門委員会・部活動のとりくみ（本校独自の内容）

担　当	実施時期	学年	実　践　内　容
生徒会	通年	全校	・あいさつ運動　　※生徒集会
環境委員会	通年	全校	・校内奉仕作業，清掃用具点検 ・花いっぱい活動（グリーンカーテン・花壇など） ・募金活動　　・エコキャップ運動
保健委員会 保健体育科	１１月	２年	・ＡＥＤの使い方講習会 ・運動会への招待（地域の老人会など）
歌声放送委員会	１０月	全校	・おおとり祭への招待 地域の老人会の招待，記念品の進呈
音楽部		部員	・福祉交流会への参加 ・小学校への演奏指導
美術部	７月 １０月	部員	・七夕飾りの作成 ・おおとり祭での記念品（箸入れと箸）作成

生徒会本部や専門委員会で作成した掲示物等，部活動の活動の様子

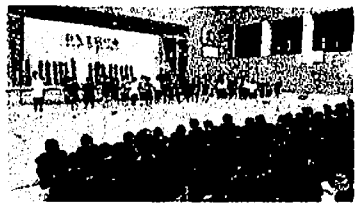
③ 生徒会行事の紹介

《３年生を送る会》

在校生による卒業生に向けた思い出のスライドショーを制作し，音楽とナレーションを載せて発表した。また，生徒と職員による劇を上演し，会場全体で卒業生に向けてのメッセ

ージを贈った。そして，卒業生からは在校生や職員に向けた感謝の言葉と歌が贈られた。卒業への決意と感謝，そして卒業を祝う気持ちにあふれた会となった。

《新入生歓迎会》



進級した２，３年生が最初に行う行事である。生徒会本部からは今後の学校行事と生徒会組織についての説明，各委員会からは委員会活動についての説明と学校生活で守るべきルールについての注意があった。また，各部活動からは活動内容のアピールと実績の報告が行われた。発表に際しては１年生にわかりやすいよう，視覚や聴覚に訴える工夫が凝らされていた。

《おおとり祭》

生徒会本部と各委員会が協力しながら運営する。午前中の合唱コンクールでは歌声放送委員会が中心となり進行される。午後の文化的発表では少年の主張や英語スピーチなど言語的な活動のほか，ダンス発表などの様々な表現活動が行われた。特に海外派遣事業の報告会では，現地の写真を活用した発表が行われた。

6　成果と課題

（１）成果

○生徒会活動において，代表者委員会を様々な意見の集約の場とするために，学級会を位置づけ，専門委員会との連携ができるよう日程調整を行っている。各学級の実態に応じた話し合いを進めることができ，あるとりくみができなかった学級に対して，全体の場で協議しできる学級の工夫を紹介するなど，課題意識をもった話し合いができるようになっている。今後も課題解決能力の育成に努めていきたい。

○校外学習へのとりくみにおいて，生徒自身が作り上げるプロセスを大切にすることにより，自分の意見と他人の意見からよりよい方向を探ろうと建設的な話し合いができるようになり，よりよい人関係づくりができたように感じている。また，自ら課題や問題点を見つけ，解決しようとする姿も見られるようになった。

（２）課題

○人間力とは必ずしも数値で計れるものではなく，手立てを講じたからすぐに効果が現れるものでもない。その上で，生徒の実態を把握した上で育てたい力を明確にし，その力の育成に向けてどのようにアプローチしていく必要がある。教員が様々な場面で指導にあたる際に，どのような視点でとりくみ，目の前の生徒をどのように育てていきたいかという姿勢が一番大切であると感じた。

～資料編～

各教科・領域の実践

各教科・領域の実践

（1）国語科におけるとりくみ

＊国語科において伸ばしたい能力

○読む能力や書く能力などの基礎・基本
○興味・関心を持って文章を読み，登場人物の心情や筆者の主張を読み取ろうとする能力
○自分の考えを発表する能力

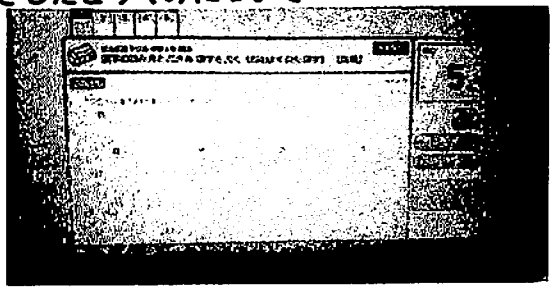
＊国語科における具体的な手立て

①題材ごとに確認テストを実施するとともに，学習ソフトを活用し，基礎・基本の定着をめざす。
②資料を大きく提示したり，動画を視聴する事によって学習への意欲を高める。
③ＩＣＴ機器を活用しながら情報を収集・整理したり，まとめ・発表する活動を設定する。

＊具体的な実践について

（1）読む能力や書く能力などの基礎・基本の定着をめざしたとりくみについて

教科書に出てくる新出漢字や新出語句については市販のワークや漢字練習ノートを使って練習・確認を行った。それ以外の漢字については学習ソフト「ラインズｅライブラリアドバンス」を活用して学習を行った。基本・標準・挑戦と自分のレベルにあわせて学習を進めることができる上に，ログインすることにより，学習履歴が残るので生徒たちは目標を持って意欲的にとりくんだ。



ラインズｅライブラリアドバンスの問題画面

（2）興味・関心を持って文章を読ませるとりくみについて

説明文「ちょっと立ち止まって」の学習の導入として，生徒たちに色々なトリックアートの画像を見せ，題材に対する興味・関心を持たせることをねらいとした。大きな画面で見せたため，生徒たちはとても興味深く画像を見た。見方によって別の絵に見えるものがあることを知り，本文の読み取りも大変意欲的であった。しかし，画像を見せるのも時間をかけ過ぎてしまうとだらだらしてしまうので，ＩＣＴ活用は授業のワンシーンでの活用が有効である。

画像を見せている授業の様子

（3）自分の考えを発表する能力を高めるとりくみについて

俳句の鑑賞を発表する場面で写真や絵の掲示をし，聞いている生徒たちの想像力をかき立てることをねらいとした。生徒たちは，写真や絵を見て，思ったよりもずっと良い反応を示した。

この授業を通して，視覚に訴えることの大切さを感じた。テレビ画面だと次の画面に移った時，前の画面は消えてしまうが，このやり方だとずっと残って生徒が見ることができるので，写真や絵の掲示は有効であったと思う。

鑑賞を発表している授業の様子

（２）社会科におけるとりくみ

＊社会科において伸ばしたい能力

○基礎的・基本的な知識 ○既習事項を活かし，社会的視点に立った思考力・判断力・表現力

＊社会科における具体的な手立て

①単元ごとに確認テストを実施する。 ②授業を展開する上で，効果的な場面で資料を活用する。 ③資料をもとにした話し合いや発表などに，ＩＣＴを活用し，考えを深めさせる。

＊具体的な実践について

（１）基礎的・基本的な知識の定着をめざしたとりくみについて

①　「ちばのやる気」学習ガイドの活用について

単元ごとに「ちばのやる気」学習ガイドを活用し，生徒自身が「学習重点事項」や「学習到達目標」を知り，「ステップチェック」に取り組むことで自分の学習状態を把握し，何を身に付ければ良いかを見通すことができるよう配慮した。また，身に付けた既習事項を先の授業で活かす展開に留意した。

何の木でしょうか？

実ができました

中に何かあります

（２）効果的な場面での資料の活用について

１つの展開授業の中の全ての場面でＩＣＴを活用し続けるのではなく，その単元のどの展開のどの場面でＩＣＴを活用することで効果を高められるのか工夫した。実際には，「導入場面」「話し合いの場面」「発表の場面」の３つの場面に分けた。

導入場面では，その単元を通して興味や関心を引きつけられるような資料を工夫。

話し合いの場面では，「なぜ？」と疑問をいだかせることができるような資料を活用し，その展開授業での学習課題が明確にする工夫。

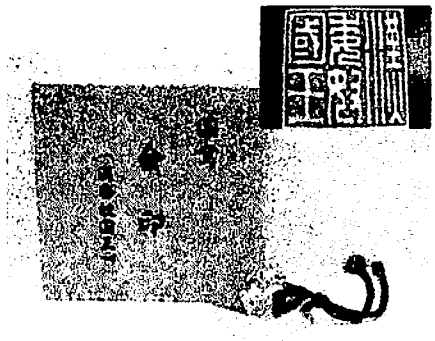
発表の場面では，単元のまとめとして，発言だけでなく，視覚化する工夫をした。

この過程で，資料に対する見方・捉え方に変化が見られた。調査学習に必要な資料の捉え方が，教科書や資料集などに載っているものという大きなくくりではなく，歴史書（例：魏志倭人伝）や写真など，学習内容を示した，より具体的な資料に焦点化することができるようになった。

（３）考えを深めさせる活動の充実について

①　導入場面でのＩＣＴの工夫について

導入段階で興味を引きつけるようなクイズをプレゼンテーションソフトを活用して行った。例えば，アフリカ州の産業の学習での導入で，カカオがなっている木の画像からだんだんとチョコレートに加工されていく過程を写しだし，早押しクイズのような形式で何が出来上がっていくのかを予想した。また，歴史分野でも同様に，金印の実物大のレプリカを触らせるとともに，「漢委奴国王」と刻まれた文字を大きく映し出すことで，当時の日本と中国の関係に興味を持たせることができた。そして，それが学習問題作成に大いに役立った。



② 話し合いの場面でのＩＣＴの工夫について

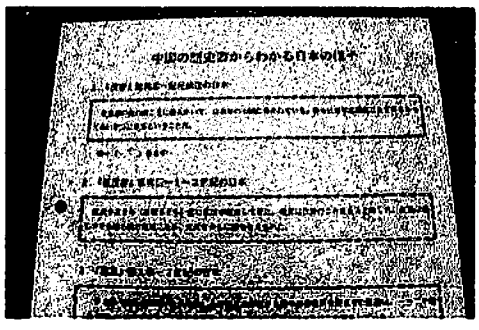
学習課題を明確にし，疑問をいだけるような資料の工夫を行った。前述のアフリカ州の産業では，カカオの生産者がカカオが何に使われているのか知らない，チョコレートを食べたことも見たこともないという映像を活用し，「なぜ？」を引き出しモノカルチャー経済の問題点に結びつけて話し合い活動を進めた。

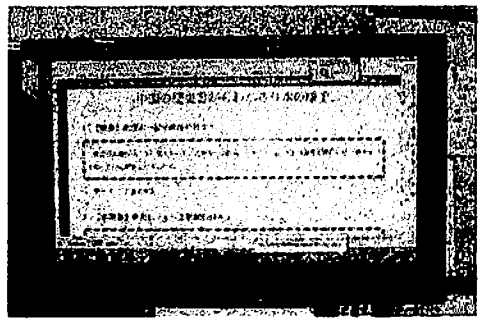
カカオを育てて家族を養う人たち

「 聞いたことはあるけど、
実際に見たことはないんだ 」

（Metropolisweb.tv より映像を引用）

また，資料の読み取りにパソコンを活用し，画面に大きく映し出し，生徒の発表から導き出したキーワードの色を変えるとりくみを行った。このとりくみにより，「資料の読み取りがしやすかった」と答えた生徒数が学級の８０％近くにおよんだ。



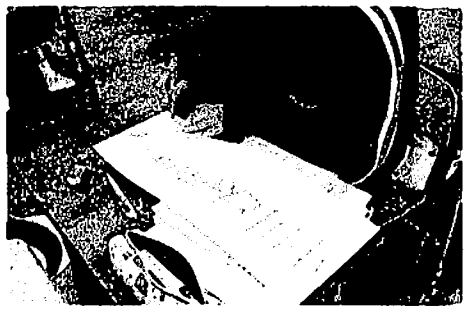


さらに，公民分野の人権の学習では，教科書に記載されている差別の項目を抽出し，カード化した。教科書をそのまま使用するよりも意見を引き出しやすくなっただけでなく，差別の内容を分類し，まとめやすくした。このことで，項目ごとの共通事項を導き出し，他項目との比較検討をしやすくした。

③ 発表の場面でのＩＣＴの工夫について

個人の予想や考え，話し合い活動のまとめとしての発表の場面で，短冊形にした模造紙に自分（達）の予想や考えを書き込み，掲示した。発表者はまとめた考えを発表しやすく，聞く側も視覚的に振り返ることができ，考えを深める一助となった。そして，発表に対して苦手意識を持っていた生徒にも，「(口頭だけでの発表よりも）この方法なら上手に発表できそうだ。」と発表への意欲を示した生徒も多かった。

今後，プレゼンテーションソフト等を活用し，表やグラフ，画像なども取り込んだ発表ができるよう工夫していく必要がある。



（3）数学科におけるとりくみ

＊数学科において伸ばしたい能力

○基礎的・基本的な知識や技能 ○既習事項と関連付けてよりよいものを求めようと自己の思考を高める力

＊数学科における具体的な手立て

①既習の学習と比較・検討する場を取り入れ，補充的な学び直しの機会を取り入れる。 ②思考過程の可視化を心掛けることで，つまずきの原因を探る指導を充実させる。 ③クラスメイトの考えを参考にして，自分の考えをよりよいものにしようとする活動を充実させる。

＊具体的な実践について

（1）基礎・基本の定着をめざしたとりくみについて

① 誤答を生かした学習の定着をめざして

問題演習やワークを進めるにあたり，単に○付けをするだけでなく，誤答の扱い方を指導している(図１)。間違いを発見し，繰り返し取り組むことで，既習事項の確実な定着を目指す。付箋などを用いて繰り返し取り組むことで，自分自身の弱点や苦手な部分が一目瞭然となり，その後の家庭学習にも上手につなげることができる生徒が増えている。付箋などを用いて学習の足跡がわかると生徒の学習意欲がより向上するのではないだろうか。

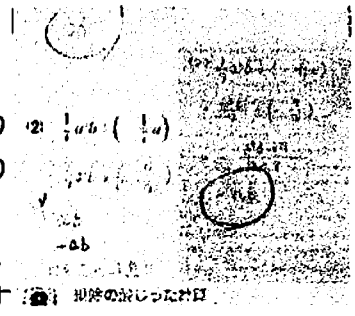


図１ ワークやり直し例

（2）思考の可視化をめざしたとりくみについて

① 生徒への言葉がけの工夫

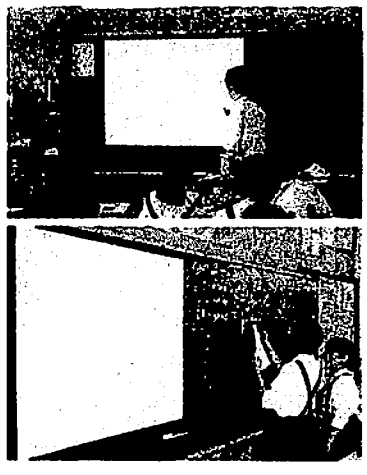
自力解決場面や誤答に気付かせたい場面に，「なぜ？」「どうして？」と問い，生徒の思考を読み取ることを心掛けている。単に間違いを教えるのではなく，まずは考え方を聞き，既習事項を想起させることにより間違いに気付かせている(資料１)。生徒がどのように考え，どのように解決しようとしているかを読み取ることが，生徒のつまずきに適切な手立てを講じることにつながると考える。

【(ｘ＋２)(ｘ＋３)は２ｘ＋５か？】
Ｔ；どう考えた？
Ｓ；ｘとｘ，２と３を足した。
※(ｘ＋２)(ｘ＋３) を(ｘ＋２)＋(ｘ＋３)とし，＋が省略されたと考えられる。
Ｔ；２＋ｘって２ｘにできたっけ？
Ｓ；できないな…。
Ｔ；単項式が多項式になっているよね。
Ｓ；＋じゃなく，×が省略かぁ！

資料１ 生徒とのやりとり

② ＩＣＴ機器の活用した発表場面の工夫

思考の育成をめざす場面では，自力解決の場面での時間確保が大切である。自分の考えを持つことにより，比較・検討場面において，別の考えを知ることで，自己の思考をより高めることにつながるからである。しかしながら，限られた時間の中で，十分な思考する時間を確保することが難しいのが現状である。そこで，実物投影機を活用することにより効率的に授業を進めたいと考えた。教科書や生徒のノート等を「情報提示」し，適切な「発問」をする。さらに指さしや書き込み等で「焦点化」することで，視線を集中させることに効果がある。また，クラスメイトの思考過程を知ることで，自分との違いを質問したり，メモをとる姿が見られるようになった。さらに投影された考え方にポイントを追加することで，自己の考え方をより詳しく，より高めることができたと思われる。



実物投影機を用いた授業の様子

（4）理科におけるとりくみ

＊理科において伸ばしたい能力

○科学事象への興味関心 ○客観的思考のある表現力

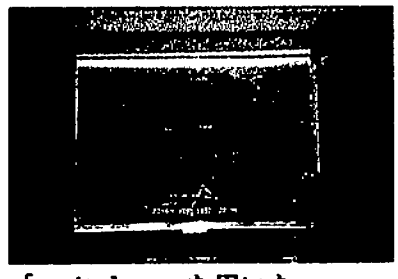
＊理科における具体的な手立て

①ＩＣＴ機器を活用した資料の提示 ②学校の地形的特徴を活かした授業展開 ③ＩＣＴ機器を活用した実験結果の共有・比較 ④理論的に筋道を立てて考えさせ，結論を発表し，学習内容を実感として理解する

（1）科学現象への興味関心を高めるとりくみについて

① ＩＣＴ機器を活用した資料等の提示

科学的な事象への興味・関心を高める手立てとして，身近な現象であっても視覚的に実感しづらい現象をＩＣＴ機器を用いて生徒に提示した。資料の例としては星座や惑星の動き，宇宙の構造を実感できる「 mitaka 」の活用や，デジタル教科書による化石発掘の指導などを取り入れた。これらを効果的に活用することで生徒の学習への関心が高まり，学習意欲が向上すると考える。



「 mitaka 」を用いた
天体の授業の様子

② 学校の地形的特徴を活かした授業展開

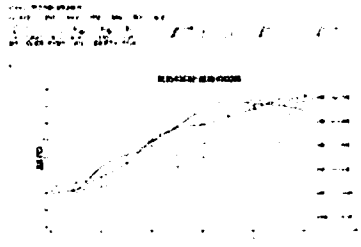
生徒自らが問題を発見し，解決に取り組むことができるよう本校の地形的特徴を活かした授業展開の工夫を行っている。急な斜面を効率的に登る方法を検討する授業では，グループによる確認実験，ディスカッション，モデル化による検証実験に取り組んだ。上記の授業展開により，主体的にとりくむことで，高い意欲を持ちながらグループ討議をし，理論的な思考力を高めることができると考える。

急な坂道を利用した
力学の授業の様子

（2）客観的思考のある表現力の育成について

① ＩＣＴ機器を活用した実験結果の共有・比較

実験結果をグラフ化し，互いに比較させることでグループ討議が活発になった。さらに，各グループの考えをホワイトボードに記入させ，それぞれの考えを解説させた。思考の流れを解説し，さらに客観的な資料として実験結果を活用させることで，他者の考えを取り入れながら自分の思考を理科的な理論へとまとめることができると考える。



実験結果をその場でグラフ化し
互いに比較させる

② 理論的に筋道を立てて考えさせ，結論を発表し，学習内容を実感として理解する

自分と他者の結論を比較し，自分の考えを整理することで学習内容の理解を深め，身近な科学的事象と結びつけていくことで，学習内容を実感を伴った形で理解できると考える。

（5）音楽科におけるとりくみ

＊音楽科において伸ばしたい能力

○音楽を形づくる要素を知覚して表現に生かす力 ○創意工夫を表現に生かす力

＊音楽科における具体的な手立て

①ＩＣＴ機器を活用して，指づかいがわかるよう手元を拡大したり，動画を視聴することによってより深い理解につなげる。 ②ＩＣレコーダーで生徒の演奏の変容を記録したり，ＣＤの模範演奏を聴いたりすることで，演奏を比較して自分たちで表現をどう深めるのか考えさせる。 ③ドリル学習やグレード制を取り入れたり，グループで学び合う場面を取り入れたりする。

＊具体的な実践について

（1）ＩＣＴ機器を活用し，理解を深める活動について

鑑賞ではＣＤやＤＶＤを活用して行った。初めにＣＤを聴き，音楽を形づくっている要素や曲想の関わりを感じ取って鑑賞した。その後，ＤＶＤで実際に演奏している様子を見せることで，それぞれの楽器の音色や特徴を感じ取ることができ，より深く鑑賞することができた。これから箏の学習の中で，タブレットを活用し，弾いている手元や座り方を記録し，自分たちの演奏に生かせるようにしていきたい。

（2）表現をどう深めるか考えさせる活動について

合唱の学習でＩＣレコーダーで自分たちの演奏を記録し，聴く活動を取り入れた。自分たちで客観的に聴くことで，強弱やバランス，音色の違いなど，自分たちに足りない部分に気づかせた。その部分を重点的に練習し，よりよい表現になるように工夫することができた。また，自分たちの演奏だけでなく模範演奏を聴くことで自分たちの演奏との音色の違い感じ取ったり，強弱の変化を理解したりして表現の工夫に生かした。

演奏を鑑賞し，気をつけたいポイントを楽譜に記入していく。

重点的にパート練習する。

合唱し，気をつけたポイントが直っているか確認する。

（3）学習形態の工夫について

リコーダーの学習では個別・グループ・全体と学習形態を変えることで，一人一人の技能を伸ばすように努めた。リコーダーアンサンブルの学習ではグループで曲を決定しリーダーを中心に練習することで生徒が主体的に活動し，表現を工夫することができた。

（6）美術科におけるとりくみ

＊美術科において伸ばしたい能力

○表現にこだわりをもち自ら追究する力 ○他者とかかわりながら発想や構想を深め表現する力

＊美術科における具体的な手立て

①ＩＣＴ機器の活用として，特に導入時の資料提示や手順の解説において，見通しを持たせることで表現意欲の向上を図る。 ②生徒の意欲を引き出す題材や場の設定を行うことで，自ら表現を追究する力を育む。 ③グループ活動での学び合いを取り入れることで，表現を通じたかかわる力の育成を図る。

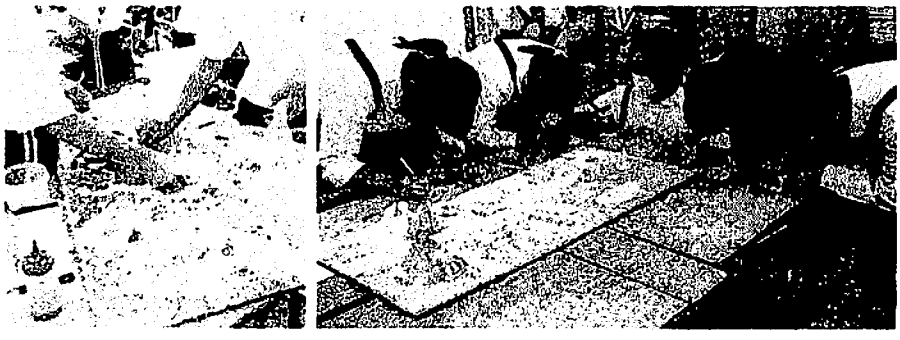
＊具体的な実践について

① 授業の導入時にプレゼンテーションによる資料提示や表現方法の紹介を行った。写真や図を活用することで生徒の興味・関心を引き出そうとした。プレゼンテーションによる解説では，スライドが切り替わっていくために，大切な情報が見えなくなってしまうことが短所である。よって，重要な資料については掲示物として黒板の板書に組み込むことで，生徒の表現意欲が向上するよう努めた。生徒は，自分の表現について，自ら情報を得ながら制作を進めることができた。

「プレゼンテーションと板書」

② 生徒が自ら表現を追究するための題材設定として，表現の主題（何をつくるか）を生徒自身が決めていけるような題材を考えた。２年生で行った「私たち的世界遺産をつくろう!」という題材では，「世界遺産」という条件はあるものの，色や形，どんな場所をつくるかは生徒自身が決定するような題材である。こうした課題解決型の題材設定を行うことで生徒は表現を自らのものとして捉え活動することができるようになった。

③ ２年生で行ったグループによる共同制作の活動では，４人で１つの作品をつくった。この活動を通じて，お互いに発想や構想を出し合い，自分一人では出せない発想の作品を制作することができた。また，鑑賞活動においても相互に作品を鑑賞し，感想を付箋に書いて伝えるなど，自分たち以外の作品のよさや工夫を感じ取ることができた。



「グループによる制作と相互鑑賞」

（7）保健体育科におけるとりくみ

＊保健体育科において伸ばしたい能力

体育的学力として，
○運動についての「思考力・判断力・表現力」
○運動についての「基本的な技能」「知識」
○運動に対する「関心・意欲・態度」　などの能力について，バランスよく身に着けさせたい。

＊保健体育科における具体的な手立て

①ＩＣＴ機器の使用により，自他の課題の発見と，よりよい相互評価の実施を図る。
（思考力・判断力・表現力）
②スモールステップ学習や，恐怖心を取り除くための教材や補助の仕方などを理解できるよう，学習課題や場の設定を明確にする。（技能・知識）
③お互いに技能的な変容を即座にとらえ，賞賛や指摘することで生徒が「できた！」ことを認識できるようにする。（関心・意欲・態度）

＊具体的な実践について

（1）ＩＣＴの活用による，思考力・判断力・表現力の育成について

陸上競技や器械運動などの単元では，個人的なフォームや改善のポイントなどが技能向上の大切な要素になり，自らの運動感覚を客観的に確認することが，パフォーマンス向上のために大きな進歩となる。タブレットを使用し，「遅延再生機能」で撮影した自らの動きを，運動感覚と比較して調整することは，自らの動きのどこに課題があるのかが明確になりやすい。また，動画として記録されたものを再確認し，「コマ送り機能」や「スロー再生機能」，「手本となる動きの動画との比較機能」を用いることで，さらに効果は上がる。グループでの教えあいでも，仲間の演技を自らの目で見たものと，記録された動きの再確認で仲間へのアドバイスがより明確になる。明確になった課題に対し，課題解決の方法を調べ，話し合ったり試してみたりすることで，思考力や判断力が育成されている。

（2）段階的な指導による技能向上と，運動に対する意欲の向上について

運動が苦手な生徒に対して，運動に対する恐怖心や苦手意識を克服するために，スモールステップ学習による段階的な指導を行っている。

◆運動に対する恐怖心や苦手意識を持ちやすい単元と，その解決のための具体的な手だて（例）

単元名	具体的な手だての例
柔道	「靴下とりゲーム」 ・組み合うことに慣れていない生徒に対し，楽しみながら正対する場面を意図的に作り出し、そこから組手の動きや役割，「くずし」などを学習する。
ダンス	「ダンスっぽい」運動の体操と「肯定的な関わりの指導」 ・「どう動いてよいかわからない」「下手くそだから笑われそう」などが学習の障害となっている。「簡単な動きの組み合わせ」や「ＥＸダンス体操」でダンスっぽい動きを経験し，授業の終わりにはよい動きをした仲間と「コメントの交換」を行い，仲間を認め表現を尊重する態度を養う。
ソフトボール	「簡易ルール」と「教具の工夫」 ・「当たったら痛い」「判断が難しい」が課題である。ウレタン製のボールで恐怖心を除き，ゲームのルールも正規のものとは大幅に変更して，ゲームで必要となる戦術的な学習内容の習得を目指す。

以上のようなとりくみを行うことは，技能向上のためだけでなく，体を動かすことが楽しい，仲間と運動することに喜びを感じるという，意欲の向上にもつながっている。

（8）技術・家庭科におけるとりくみ

＊技術・家庭科において伸ばしたい能力

○基礎的・基本的な知識や技能 ○見通しをもって作業を進めるための判断力

＊技術・家庭科における具体的な手立て

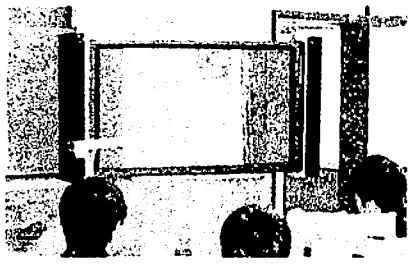
①手先の器用さの向上のため道具などの操作をさせる活動を多く取り入れる ②生徒の作業の正確さを評価する場の設定を行い，作業の反省や修正を主体的に行わせる。 ③作業内容や道具などの操作方法を明確に示すための教材・教具の準備を行う。

＊具体的な実践について

（1）基礎的な知識や技能の向上のためのとりくみについて

① 解説時間の短縮と演習時間の確保をめざして

技術・家庭科は，技術分野と家庭分野の２つの分野からなり，それにより授業時数が限られている。その上，作業学習が中心となるため，十分な作業時間の確保が求められる。一方で，基礎的な知識の定着も軽視することはできない。そこで，実物投影機を使用し，解説時間の短縮と，作業時間の確保を目指した。実物投影機を使用することにより，図を板書する時間の短縮などが期待でき，作業時間の確保が図れると考える。さらに，家庭分野では，部分標本を実物投影機で拡大することで，全員が作業内容をわかりやすく理解することができた。また，部分標本を提示しておくことで，何回でも繰り返し見ながら作業することができ，積極的な製作すなわち自ら学ぶ意欲を喚起し，思考力や判断力を高める援助ができた。



実物投影機を用いた授業の様

（2）作業の反省やふり返りを主体的に行わせることをめざしたとりくみについて

① プログラムの実行と修正を通した判断力の育成をめざして（技術分野）

モーターカーにプログラムを転送し実行するという活動において，ノートパソコン上でプログラムの制作を行う。転送したプログラムを実行し目的どおりの動きをするか確認する。その際，正常に動作しない場合は，プログラムの修正を行う。このプログラムの実行と修正の活動では，計画，実行，評価，改善という過程を経験する。プログラムないし操作のどこに異常があるか発見する過程をとおして，技術的な思考力ないし判断力を養うことをめざす。

ノートパソコンを用いた授業の様子

② 作業工程表を活用したとりくみ（家庭分野）

ハーフパンツの製作では，製作工程表を書かせている。製作内容ごとに反省を書き，教師に提出することにしている。評価されることで，より意欲が増し，毎回の授業の積み重ねが実感できる。さらに，できあがっていくにつれ，製作の喜びを感じることで，次の作業の見通しを立てることができ，製作の意欲を高めることができた。

（3）アンケート結果から（家庭分野）

物作りは，ほとんどの生徒が好きだと答えているが，中にはめんどうや苦手などの理由により嫌いだと答えた生徒もいる。しかし，昨年度，おもちゃを製作し，それを持って保育所を訪問したときに，幼児たちが大変喜んでくれたという理由から好きだと答えた生徒もいた。さらに，家庭科の学習は将来役に立つかという質問に，全員が役に立つと答えた。その理由の中には，昨年度の学習内容を日々実践しているので役に立つと答えた生徒がおり，家庭科の学習が生活を豊かにしていることがうかがえる。また，いろいろな体験をさせることで，経験が増え，できるようになると成就感を得ることができると考えられる。

（9）英語科におけるとりくみ

＊英語科において伸ばしたい能力

○ すすんでコミュニケーションをとろうとする力 ○ コミュニケーション能力の基礎 ○ コミュニケーションに必要な表現力

＊英語科における具体的な手だて

①音読練習の積み重ねを通してすらすら英文が出てくるよう日常化する。 ②スキット作りの際，少しずつオリジナルの表現を広げていく。 ③ＩＣＴを用いて自分達の発表を見ることで改善に役立てていく。

＊手だてのねらい

① コミュニケーション能力の基礎となる表現を身につけるため。
② 場面に応じたコミュニケーションに必要な表現力を身につけるため。
③ ペアで協力し合いよりよいスキットにしようとする意欲や態度を育むため。

＊具体的な実践について

【音声から文字→英文の音読→暗唱（ビデオ撮影と視聴）→スキット作り】

生徒は小学校で音声としての英語にふれているため，英語のリズムやイントネーションに慣れ親しんでいる。音声から文字指導に入る際，苦手意識をもつ生徒が見られる。そこでフォニックスソングを通して音と文字に自然に慣れるよう段階を踏み，徐々にリーディングにつなげた。英文の音読ではジェスチャーリーディングを取り入れ体で表現しながら英文を発するようにした。そのようにしたことでジェスチャーを示すと自然に英文がでてくる生徒が多く見られた。ペアで本文を暗唱，クラス全員の前で発表，ビデオ撮影へと段階を進めた。また既習の表現を用いたスキットの例を活用したオリジナルのスキット作りを行った。自ら場面を設定し自分の言葉で表現する機会を与えることでより生きた英語として身につくと考える。

※ビデオ撮影と視聴を通しての変化（147名のアンケートより）

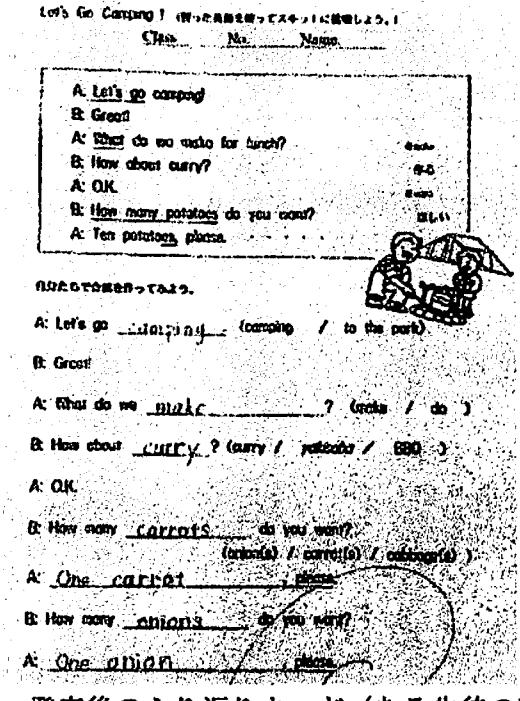
「教科書本文の暗唱のビデオ撮影と視聴を続けることで，以前より良くなったこと」

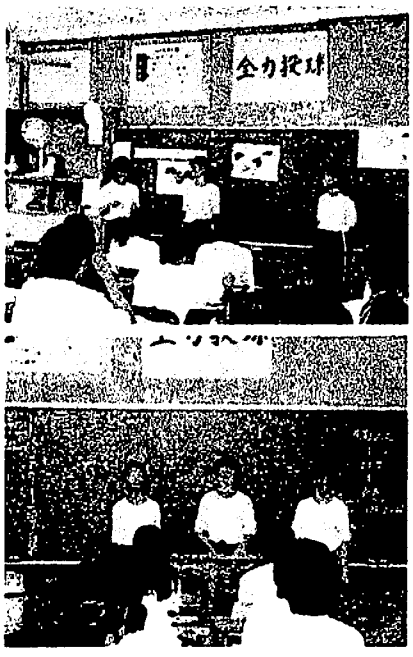
・家での音読練習が増えた。（覚えるまで41名　スラスラ読めるまで65名）
・発表時に自信をもって堂々と発表できるようになっている。（はい　56名　少し　73名）
・練習や発表時に協力できるようになっている。（はい　111名　少し31名）
・発表が楽しくなっている。（はい　61名　少し　73名）
・人前でドキドキしなくなった。（57名）
・大きな声で言えるようになった。（68名）
・発音・イントネーションが良くなった。（57名）
・英語らしく言えるようになった。（61名）
・自信につながっている。（54名）
・その他

きちんと人に伝えるということを心がけることができた。
自分で英文が作れるようになった。
アイコンタクトができるようになった。
覚えたところが書けるようになっていた。
堂々と話せるようになった。
覚えるのが早くなった。
発表が楽しくなった。
みんなとのふれあいが多くなった。
グループで助け合えるようになった。
友達の発表の良い点がわかった。など

ＩＣＴを活用することで，より具体的に気持ちを伝える方法を生徒自身が気づき改善していることがわかった。また，思った以上に様々な面での効果があることがわかった。今後も一人ひとりが「コミュニケーション能力」を身につけていけるよう効果的なＩＣＴの活用方法を考えるとともに音読練習やスキット作りを通して授業の工夫・改善を行っていきたい。

○　既習の表現（What　How many ）を使ってスキット作り

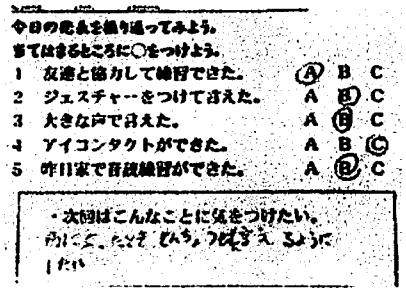




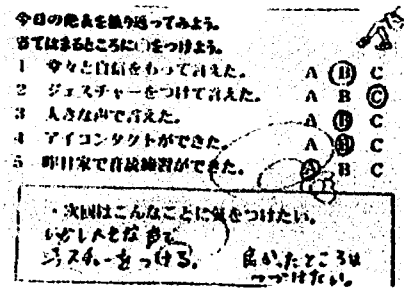
スキット作りの授業の様子

○　発表後のふり返りカード（ある生徒の変容の様子）

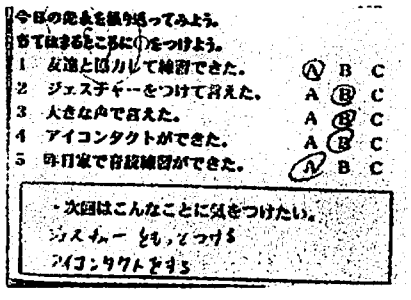
①ジェスチャーをつけて発表しよう(4－3)



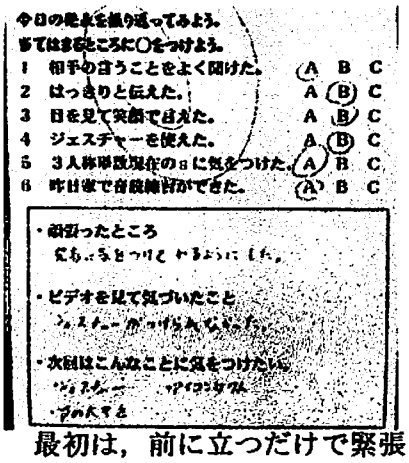
②自分のことを話そう(My Project 1)

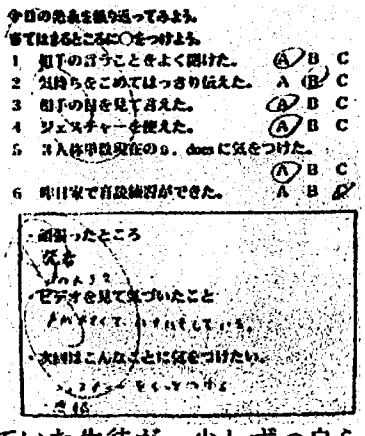


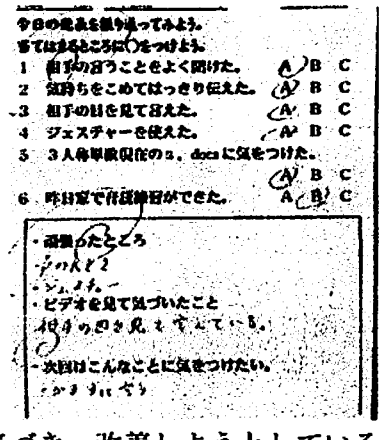
③協力して発表しよう(5－2)



④「ほかの人(1人)がすること」について対話文を言えるようにしよう(6－1)&(6－2)&(6－3)







最初は，前に立つだけで緊張していた生徒が，少しずつ自ら気づき，改善しようとしていることがわかる。また，（６－２）では「感情にも気をつけたい」とコメントし，（６－３）では３段階による自己評価が（６－１）に比べ向上している。この実践を通して，自分を改善しようと自己を見つめる様子がうかがえる。

(10) 特別支援教育におけるとりくみ

＊特別支援教育において伸ばしたい能力

○読み・書き・計算といった，基礎・基本の学力
○思考し，判断し，表現する力
○基本的生活習慣の確立

＊特別支援教育における具体的な手立て

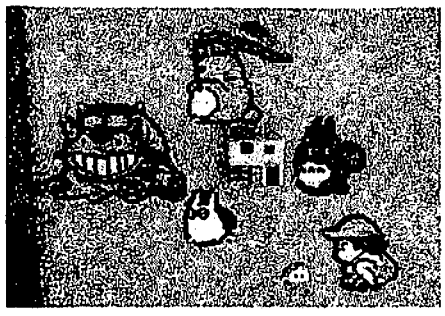
①生徒の能力や学習ペースに沿った個別指導を実践していくことで理解度を高めていく。
②ＩＣＴを活用した，制作活動や調べ学習を実践することで，学習意欲の向上を図る。
③日々の生活や将来に向けて，「なぜ必要か」を考えさせながら指導していく。

＊具体的な実践について

（１）学習意欲を向上させるための授業の工夫

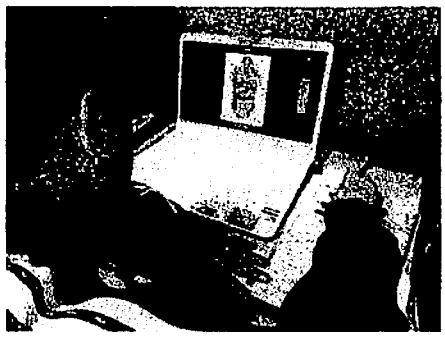
① 作業学習での活用

本学級の生徒は自閉症・情緒障害学級である。作業学習では，アイロンビーズの作品を制作しており，熱心に取り組んでいる。作品については，インターネットで自分が作りたい物を選び，それを設計図として制作に取り組んでいる。自分で作りたい物を選ぶことで，複雑な作品に挑戦するなど，より意欲的に活動している。



② 保健学習での活用

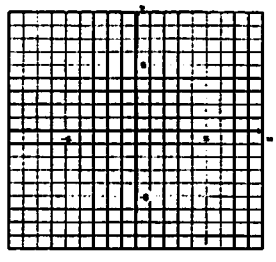
保健学習の『からだの発育・発達』分野では，人体の臓器の名称や部位を調べて資料にまとめる学習を行った。自分で見やすいページを調べ，使用にまとめることができた。そこから，臓器の機能に興味を持ち，腸の長さを調べるなど，さらに学習に対する意欲が高まった。調べたいものが短時間で見つかり，写真や図で出てくることが学習意欲向上に繋がっていると考える。



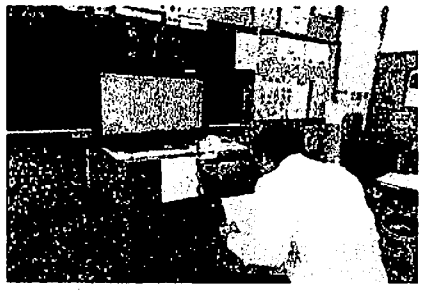
（２）集中力を持続させるための授業の工夫

① 数学科での活用

『関数の学習』でＩＣＴを活用した授業にとりくんだ。生徒にとって，長時間机に向かって集中して学習にとりくむことは課題である。そこで，思考の場面が多い数学の授業において，短時間集中させる場面を多く作ることにした。そのとりくみとして，(図１)をパソコンを通して映像に写し，パソコンで座標をとる学習を行った。机上での学習が主ではあるが，授業の合間にパソコンでの学習を取り入れることで，良いリフレッシュの時間になると同時に，楽しく集中して課題に取り組むことができた。生徒からも「ゲーム感覚で面白い」と言う意見を聞くことができた。また，友人の課題への取り組みの様子も共有することができるので，どこでどう間違えたのか，友人同士で確認し合いながら学習を進めることができた。



(図１)



(11) 道徳におけるとりくみ

＊道徳において伸ばしたい力

○望ましい生活習慣の確立 ○自分の生き方を見つめ，自ら特性を伸ばそうとする意志

＊道徳における具体的な手立て

①望ましい生活習慣を身につけ，自己の向上を図りながら心身ともに健康な身体を育てようという意志 ②他に学ぶ心と人に対する感謝と思いやり ③役割と責任，勤労の尊さに対する理解と，集団生活や地域社会のために積極的にとりくむ意欲

＊具体的な実践について

（1）望ましい生活習慣の確立について

＊中学生の新しい道２「遅刻」　中学生の新しい道１「シンプル・イズ・ビューティフル」

プリント用図版と関係図を用いて,主人公の行動の問題点の焦点化を図った。図を使用することにより，話し合いの時間を増やすことができた。話し合いに時間をかけられたためか，より多くの意見が出ていたように感じる。

また，学級の係活動や生徒会活動とリンクさせ，毎日の生活についてのチェック，意欲付けなどを行い，継続的な指導につなげている。

（2）他に学ぶ心と人に対する感謝と思いやりについて

＊千葉県映像教材「手のひらの小さな世界」

映像教材と図版を用いて，主人公の行動を通して自分の行動を振り返らせた。映像を見ることにより，生徒たちは読み物教材より問題が身近に感じられたようだった。日常的な指導としては，読書や行事への参加を通して，話し合い活動の中で協調して他のことを思いやることを促している。

（3）役割と責任，勤労の尊さに対する理解について

＊自作資料「重役会議」

班を作り，会社の重役になったつもりで，どのような意識や能力を持つ学生を採用するべきか資料をもとに話し合う。また，班ごとに話し合いの結果を発表し，意見の交流を行った。広く意見を聞くことにより，学級や地域の中で役割を果たすにあたって必要な能力について考えることができた。

（4）ＩＣＴとの関連について

千葉県の映像教材の活用を行った。映像を流すだけでなく，映像から掲示物を作り，ストーリーや登場人物の確認に役立てることができた。また，映像を見ることにより，読み物資料と違った生徒の興味・関心をもたせることができた。

(12) 総合的な学習の時間におけるとりくみ

＊総合的な学習の時間において伸ばしたい能力

○情報収集・活用していく力 ○課題の解決に向けて調査した成果をまとめ，表現する力

＊総合的な学習の時間における具体的な手立て

①校外学習・修学旅行等の準備活動において，係ごとの話し合いの時間を作る。 ②新聞やレポートを作成し，掲示や報告会で発表する場を設定する。 ③情報の収集・活動報告等でＩＣＴ機器を活用する。

＊具体的な実践について

（１）係ごとの話し合いの時間について

各学年とも，準備活動として，実行委員会・班長会を中心に５～６の係に分かれ，仕事の内容を確認し，各係の目標と注意事項を明確にした。係別会議で決定したことを学年集会で代表者がしおりをもとに，全体への呼びかけの時間を設定した。さらに，学習係はインターネット等を使い見学地の資料を集め，内容をまとめ掲示物を作成した。

（２）新聞やレポートの作成・掲示について

総合的な学習の時間のまとめとして，図１のように新聞を作成し廊下掲示をした。各学年とも写真や絵を入れながら，工夫した作品を仕上げることができた。

また，第２学年では，職場体験学習の報告会を事業所別に屋台村形式で発表をした。発表の仕方として，模造紙に書く・紙芝居・パワーポイント・寸劇等それぞれのグループで話し合い決めた。さらに，前半発表するグループと後半発表するグループに分け，６会場で行った。

生徒全員が何かの係を担当し発表することは，自分たちの体験を表現する上で良い経験になったと考える。生徒の感想にも，「とても緊張したが楽しかった」「発表の後になって，もっとゆっくり説明すれば良かった」「模造紙に書く時に，他の班のように写真や絵を入れれば良かった」等多くの反省が書かれてあった。また，自分で見たい事業所を選択できたので，発表を聞いた後の感想・質問の時間も活発な意見が出ていた。

図１　生徒が作成した修学旅行新聞

（３）ＩＣＴ機器の活用について

修学旅行の学級別・班別行動の計画を立てるときにＩＣＴ機器の活用は有効であった。生徒はとても興味をもって鑑賞していた。班別行動の日程を決めるときもＩＣＴ機器を活用することでバス・地下鉄の乗り換えが分かり時間を有効に使うことができた。職場体験学習の報告会ではパワーポイントを活用して発表した。体験したときの写真・動画等をうまく活用することで，旅行会社や文化会館等，普段仕事の内容が分かりにくい職種も理解しやすかったようだ。（図２）

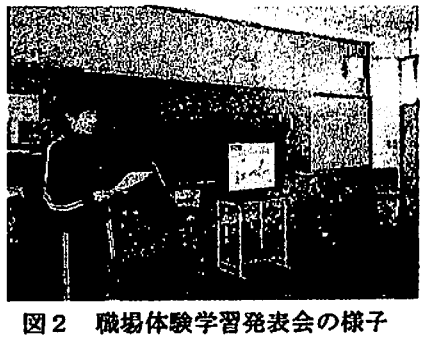


図２　職場体験学習発表会の様子